55歳のつぶやき

津波とウイルス、いま思うこと

松野美保（高35回）

大学卒業後から日用品メーカーに勤務している。今年3月の突然の在宅勤務指示には慌てたが、元々デスクワークが主であったこと、そして便利なweb会議システムのお陰で大きな支障もなく仕事ができている。一方で、同僚とのコミュニケーションはやはり取りにくいし、ちょっとした行き違いも起こる。そのストレスか、最近晩酌の頻度が増してしまった（元々呑兵衛なだけか？）。

私の仕事の内容はというと、調査部からマーケティングリサーチ部など部署の看板は何度か変わったが、いわゆる消費者調査の仕事を続けている。このコロナ禍でも意識調査を毎月行っているのだが、その中で気づいたことがある。3月にはとにかく「不安」を語っていた消費者だが、5月になると、「不満」や「非難」の声が見られるようになった。この状況で休業せざるを得ない方など、政府や自治体の対応に不満を持つ方が多いのはわかるが、営業自粛しない店舗などへの非難が特に辛辣なのだ。仕方のないことだとは思うが、不安・疲れ・鬱屈…、溜まったものが吐き出されている感じがしてしまう。

●まつの・みほ
旧姓・田中。飯田市正永町出身。東北大学文学部卒業。花王株式会社マーケティングリサーチ部リサーチマネージャー。高校時代は女子ソフトボール班、1番・サード。犬好き、柴犬飼育中（黒柴・9歳・肥満気味）。

弱くて強い、強くて弱い

そんなとき、東日本大震災で被害を受けた東北の方々のことを思い出した。私は大学時代を仙台で過ごし、東北は第二の故郷と思う土地だ。休暇にはよく東北各地を旅したが、食べ物もお酒もおいしく人の心も厚く、いつどこに行っても居心地がよかったのを思い出す。震災直後にはなかなか足を運べなかったが、数年後から、勤め先が参画した社会貢献活動に参加する形で、避難所を巡ってちょっとしたイベントを行うお手伝いをした。

その中のひとつ、学生時代にも訪れたことがあった岩手県の陸前高田は、かつての美しい砂浜・松林は失われ、大型のダンプカーが盛んに行交い大規模な嵩上げ工事が行われているところだった。震災後この土地を有名にした「奇跡の一本松」は移転され、オブジェのように寂しく立っており、そこで伺った語り部の方の言葉は今も心に残っている。「あの時の津波は、14mを超す高さで、皆さんが思い浮かべるような波ではなかったんですよ。水の壁です」と。そして「自然の爆発的なエネルギーは人間の想像をはるかに超えるんですよ」と静かに続けられた。

2016年、岩手県陸前高田にて。復興ボランティア「スマイル東北プロジェクト」の一員として。（2列目中央が筆者）

その一方で、震災後5年以上経った時点で未だ仮設住宅で暮らされていた高齢の方々が、おおらかさと優しさを持ち続けていらっしゃったことには驚きを感じた。一人暮らしの方も少なくなかったが、互いに朝・晩と声をかけ助け合って暮らしておられた。そして一度限りに訪れた私たちさえ笑わそうと、冗談まじりの話をしてくださる。

人は自然の脅威の前では無力であること、一方で大切なものを根こそぎ奪われるような経験をしても、立ち上がる強さと、互いを助け思いやる優しさを持ち続けている方がいること、人の弱さと強さを思う経験だった。

サウイウモノニ、ワタシハナレル？

そして、今回のウイルスだ。なんとか早く収束してほしいと願ってやまないが、全世界に広がった現状、噂される2波、3波を考えれば、見えない津波にじわじわと襲われるようなダメージを受け続けるのかもしれない。悲観的にはなりたくないが、これからの人生、またどんなウイルスに怯えることになるともしれないし、どんな自然災害が起こるともしれない。それに直面した時、自分は強くそして優しくいられるのだろうか。

岩手県花巻に生まれた宮沢賢治は「雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈夫ナカラダヲモチ、慾ハナク、決シテ瞋（いか）ラズ、イツモシズカニワラッテヰル（中略）、サウイウモノニ、ワタシハナリタイ」そう綴った。そう、「そういうものに私はなりたい」そんなことを思う55歳の5月だ。

先日、晩酌をしながらテレビをつけたら、マツコデラックスがこう言っていた。「ダメよダメ。今は誰も責めちゃダメよ～」と。そうだよねマツコ、今は思いつめず誰も責めずにいたいよね。

――2020年5月15日、緊急事態宣言下の横浜にて